



# 晴天の心

立教185年12月号  
 大阪府富田林市寿町4-9-10  
 URL:www.tomiishi.net  
 TEL:0721-23-3466 090-5243-4669



月次祭 12月19日(月) 午前10時～  
 婦人会例会 12月9日(金) 午前10時～



今年の冬は暖冬なのでしょうか？

11月は比較的暖かい日が多かったように思います。ネコたちは暖かいところをよく知っています。朝、食事を終えると、この写真のように前栽のよく日の当たる場所や屋根の上などで集まって固まってひなたぼっこしています。そして、ある程度からだが暖まると、寝床のある場所へ移動していきます。

以前、パソコンを教えに行っていたお宅は、南向きの大きな窓の部屋がありました。退職後にうつ病となりその対策としてリフォームをおこなう時に、冬でも陽が入る部屋を造ったと聞きました。太陽の光で体内のスイッチがONになり、暗く沈んだところや感情を、明るく勇んだ気持ちに切り替えて過ごすことが出来るようになったと話されていたのが心に残っています。

日の出が遅くなり日の入りが早くなり、太陽は真上まで上がらないこれからの季節、太陽の暖かさからのありがたいことを日々感謝して暮らしていきたいですね。

立教186年本部お節会  
 1月5日(木)～7日(土)  
 10時～13時  
 詳細は後日発表



おせちが3年ぶりにおこなわれることになりました。コロナ禍前のお節会では、会場が第1,2,3,6 食堂とテント2 会場でキャパ6,000 席だったものを、第1,2 食堂とテント1 会場、東右一棟 2,3F,講堂のキャパ3,000 席とする。

また、1人一膳(出来上がったものを給仕され、おかわりなし)で、出口で袋入りのお餅2切れをくださるそうです。もちろん、神酒はなしです。個人券も従来のように配布されるようです。必要な方はご連絡ください。お正月の楽しみが増えましたね。



大阪教区布教部  
 1000日神名流し  
 大阪なんば駅前にて実施中

大阪教区布教部1000日神名流し実施中。

10月27日より大阪なんば高島屋前で毎日神名流しがおこなわれています。時間は30分程度ですので、なかなか出会うことは少ないかもしれません。1ヶ月間で300名くらいの人に参加して、神名流しや路傍講演をおこなったということです。

3年間続く長いにをいかけ活動ですので、もし見かけたときは是非応援してください。スケジュールなどは、「陽気ぐらし大阪」のHPに掲載されています。QRコードからもアクセスできます。



## 天理教教祖伝逸話篇

### 22.おふでさき御執筆

教祖は、おふでさきについて、「ふでさきというものありませんがな。あんた、どないに見ている。あのふでさきも、一号から十七号まで直きに出来たのやない。神様は、『書いたものは、豆腐屋の通り見てもいかに。』と、仰っしゃって、耳へ聞かして下されましたのや。何んでやなあ、と思いましたが、神様は、『筆、筆、筆を執れ。』と、仰っしゃりました。七十二才の正月に、初めて筆執りました。そして、筆持つと手がひとり動きました。天から、神様がしましたのや。書くだけ書いたら手がしびれて、動かんようになりました。『心鎮めて、これを読んでみて、分からんこと尋ねよ。』と、仰っしゃった。自分で分からんところは、入れ筆しましたのや。それがふでさきである。」と、仰せられた。これは、後年、梅谷四郎兵衛にお聞かせ下されたお言葉である。



### 44.雪の日

明治八、九年頃、増井りんが信心しはじめて、熱心にお屋敷帰りの最中のことであった。正月十日、その日は朝から大雪であったが、りんは河内からお屋敷へ帰らせて頂くため、大和路まで来た時、雪はいよいよ降りつゆのり、途中から風さえ加わる中を、ちょうど額田部の高橋の上まで出た。この橋は、当時は幅三尺程の欄干のない橋であったので、これは



危ないと思い、雪の降り積もっている橋の上を、跣足になって這うて進んだ。そして、ようやくにして、橋の中程まで進んだ時、吹雪が一時にドッと来たので、身体が揺れて、川の中へ落ちそうになった。こんなことが何回もあったが、その度に、蟻のようにペタリと雪の上に這いつくばって、なむてんりわうのみことなむてんりわうのみことと、一生懸命にお願いしつつ、やっとの思いで高橋を渡り切って宮堂に入り、二階堂を経て、午後四時頃お屋敷へたどりついた。そして、つとめ場所の、障子を開けて、中へ入ると、村田イエ

が、「ああ、今、教祖が、窓から外をお眺めになって、『まあまあ、こんな日にも人が来る。なんと誠の人やなあ。ああ、難儀やろうな。』と、仰せられていたところでした。」と、言った。りんは、お屋敷へ無事帰らせて頂けた事を、「ああ、結構やなあ。」と、ただただ喜ばせて頂くばかりであった。しかし、河内からお屋敷まで七里半の道を、吹雪に吹きまわられながら帰らせて頂いたので、手も足も凍えてしまって自由を失っていた。それで、そこに居合わせた人々が、紐を解き、手を取って、種々と世話をし、火鉢の三つも寄せて温めてくれ、身体もようやく温まって来たので、早速と教祖へ御挨拶に上がると、教祖は、「ようこそ帰って来たなあ。親神が手を引いて連れて帰ったのやで。あちらにてもこちらにても滑って、難儀やったなあ。その中にて喜んでいたなあ。さあ／＼親神が十分々々受け取るで。どんな事も皆受け取る。守護するで。楽しめ、楽しめ、楽しめ。」と、仰せられて、りんの冷え切った手を、両方のお手で、しっかりと握り下された。それは、ちょうど火鉢の上に手をあてたと言うか、何んとも言いあらわしようのない温かみを感じて、勿体ないやら有難いやらで、りんは胸が一杯になった。

### 111.朝、起こされるのと



教祖が、飯降よしゑにお聞かせ下されたお話に、

「朝起き、正直、働き。朝、起こされるのと、人を起こすのとでは、大きく徳、不徳に分かれるで。蔭でよく働き、人を褒めるは正直。聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。もう少し、もう少しと、働いた上に働くのは、欲ではなく、真実の働きやで。」と。



## かしの・かりもののお話14

心には3つの段階がある。

①フィール (Feel) = 感じる

②シンク (Think) = 思う

③コンシダー (Consider) = 思案する

の3段階でそれは表現できる。

一段階ずつ見ていくことにします。



えて間違いないと思います。もちろん「こころ」

には「心定めて」など深い思案を意味する言葉も

たくさん出てくるのですが、このおふでさきに

代表されるような用法は、間違いなく「感じる」

Feelだと思えます。

つまり、親子でも夫婦でも兄弟でもみんな感性

が違うということです。同じように見えている風

景でもそれぞれに見え方が違うのです。それはあ

る意味当然のことです。しかし私たちの日常生活の場では

「同じ風景に見える」ということが前提で会話がなされ

ています。だからぶつかるのです。

「ふつう、こうでしょ？」

「なんで分からないの？」

こういう会話は、この「感じる」の部分の違いによって生

まれているのです。

そして先月申しましたようにこれは「からだ」の働きです。

脳のニューロンの反射です。ですからある意味では仕方の

ないことなのです。

小さいことで腹が立つ。それは仕方のないこと。ここで

相手を責めたり、あるいは落ち込んだり自己嫌悪に陥った

りしないことが、日常生活では大切なのです。

続きはまた来月。

(つづく)

をやかでもふう／＼のなかもきよたいも

五号 8

この「心」などは、このFeel(感じる)の意味だと考

とがあります。

私はこの3つのことばが、このFeel、Think、

Considerに当たるのではないかと考えています。

おふでさきというのはけっこう厳密に言葉を使い分

けられていると思っっているのです。

をやかでもふう／＼のなかもきよたいも

をやかでもふう／＼のなかもきよたいも

## かしの・かりもののお話15

心には3つの段階がある。

①フィール (Feel) = 感じる

②シンク (Think) = 思う

③コンシダー (Consider) = 思案する

の3段階でそれは表現できる。

今月は2段階目と3段階目です。

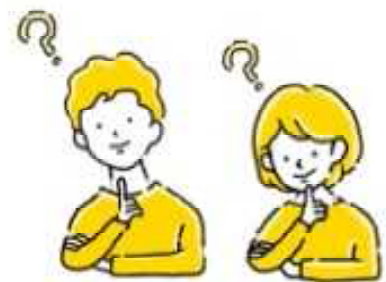
心でフィール (Feel) 感じたことをいったん心に落とし込む。これが2段階目のシンク (Think) つまり「思う」です。

おふでさきには「をもふ」という言葉が出てきます。これは単純に心に受け止めるという意味で良いと思うのですが、1次的な受け止め方だと思って良いと思います。

たとえば「イヤだな」と感じる。ここまではフィジカルです。フィール=脳の反射ですね。

それを「相手が悪い」「なんでこういうことをするのか」と受け止めてしまうことが「思う」だと思おうのです。ごく一般的な受け止め方です。

それに対してコンシダー (Consider) = 「思案する」



は少し違います。この思案する心はおふでさきには「しやん」あるいは「思やん」という言葉で出てきます。

自分の思惑を中心にすえ、それ以外を否定して受け入れないのではなく、親神様の思惑を中心に据えて、なってきたことを「親の思い」として受け止める考え方です。

いったん相手が悪いと思っても、「待て待て」と自分の心を振り返る。あるいはこういう状況をお作り下された神様の思いを考える。もう一歩進んで、こういう状況をお作り下された「神様の働きの苦勞」に思いをはせる。これが「真の心」「誠の心」だと言えるのではないのでしょうか。この「待て待て」が大事なのです。これを待てるか待てないか。瞬間湯沸かし器で爆発させるか思いとどまるか。ここに人間性が表れます。

「成人とはを、やの思いに近づく歩みである」かつて現真柱様は論達第二号でこうお示しく下さいました。「思い」には段階があります。人間の「思い」そして神様の「思い」。この二つの「思い」を限りなく近づけていくこと。それが「思案」(Consider) = 「しやん」なのです。

(つづく)